



ニューヨーク補習授業校だより

絆・きずな

平成 30 (2018) 年

1 2 月 1 5 日 発行

第 2 8 号

夢のふくらむ学校

W 校

8日は、W校の次年度入園入学受付及びスクリーニング1日目でした。書類作成の後、全員1時間程度の集団スクリーニングを受けていただきました。ご存じのように、補習校は日本語で日本の学習を行う学校ですから、教師の指示が理解できることが入園入学の前提になります。30名の子どもさんの中には、年中組入園希望の早生まれの場合、3才のお子さんもあります。年中組のスクリーニングでは、グループになって教室を移動する際でも、お母さんやお父さんと離れられないお子さんも見られましたが、はじめはお母さんやお父さんと離れられないのも仕方ないことだと思います。6～7名の小グループに分かれて、本校幼児部の教師が模擬授業を行いました。アイスブレイキングのゲームやおもちゃで緊張感をほぐした後は、自己紹介をしました。はじめから積極的に参加するお子さん、なかなかグループの輪に入れられないお子さんなどそれぞれでしたが、徐々に打ち解けていき、一緒に歌を歌ったり、絵を描いたりしていました。その様子を、本校の相談員や教員で観察し、必要に応じて声かけを行い、反応を確認します。安全面からも、いざというときに教師の指示が理解できることは必要です。また、スクリーニング中に観察者が気になった点について、保護者の方と面談するケースもありました。15日には後半のスクリーニングを行います。結果は後日郵送されます。



L I 校

日本人の手先の器用さはとても有名ですが、もの作りへのこだわりも、幼児期の工作に始まると考えてもよいのではないのでしょうか。日本では、幼小中と図画工作・美術、技術家庭科などの授業を通して、手指の巧緻性を高める学習を行っています。できあがりを予想し、見通しを持って配色を考えたり、材料を切ったり、糊がはみ出ないように貼ったりしながら、製作を進めていきます。このような経験の積み重ねが、もの作りの基礎にあります。余談ですが、アフリカのある国にAIDSのワクチン接種の支援を行ったところ、逆にAIDS患者が増えたという話を聞いたことがあります。何故か。使用済み注射針のディスポーザーが、厚紙の組み立て式だったのですが、現地の人たちにはそのことが理解できずに使われず、床に落ちた針を踏んで2次感染したということでした。このことから、成人前の多様なもの作りの経験が、いかに大切かが分かります。

さて、幼児部では、七五三にちなんで千歳飴の袋を一生懸命作る子どもたちの姿がありました。思い思いのイメージをふくらませながら、一生懸命取り組んでいました。アメリカでは、晴れ着や羽織袴で神社に行くことも少ないかもしれませんが、子どもの健やかな成長を願う日本の伝統行事について、少しでも理解が深まればと願っています。なお、マンハッタンにあるジャパソサエティでは、七五三用の衣装やお祓いなどもしてもらえるプログラムがあるそうです。



第48回JXTG童話作品集「童話の花束」を寄贈していただきました。

上記童話作品集を、今年度も寄贈していただきました。これは、JXTG社（日本ではENEOS）が日本国内のみならず、広く世界から年齢を問わず創作童話を募集して、その優秀作品を1冊にまとめたものです。1970年代から続く歴史ある事業だそうです。作品集は、L I 校、W校に学校図書として配置しました。3月からは、作品募集が始まるようです。皆さんも、童話の世界を創造してはいかがでしょうか。